

# IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 185, 2019

---

## VIEW 展望

山形と映像／村山匡一郎…2

## INFORMATION 学会組織活動報告

支部・研究会だより 映像テキスト分析研究会…3 アニメーション研究会…3-4  
 映像心理学研究会…4 ヴィデオアート研究会…5 映画文献資料研究会…6-7  
 アナログメディア研究会…8-10 写真研究会…11 アジア映画研究会…12-13  
 メディアアート研究会…14-15 関西支部…16 中部支部…16-18

## FROM THE EDITORS

編集後記…18

---

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第 185 号」2019 年 5 月 15 日発行  
 発行人：武田潔 編集担当／総務委員会：西村安弘（委員長）・橋本英治（副委員長）  
 安部裕・阿部宏慈・岡島尚志

日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘 2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内  
 phone：03-5995-8287 / fax：03-5995-8229 / e-mail：office@jasias.jp  
<http://jasias.jp/>



# 山形と映像

村山 匡一郎

日本映像学会の今年次大会は山形市にある山形大学で催されるが、大会が山形市で開催されるのは、1997年に第23回大会が東北芸術工科大学で開催されて以来、2度目になる。山形市は人口約25万人の中核都市であるが、2017年に「ユネスコ創造都市ネットワーク映画部門」に加盟が認定されたように、映画・映像との関係は際立っており、地域に密着している。

なかでもよく知られるのが山形国際ドキュメンタリー映画祭といえる。この映画祭は山形市制100周年記念事業の一環として企画され、1989年から隔年で開催され、開催年ごとにコンペティション部門への応募、観客動員、さらには映画を学ぶ学生や研究者たちが国内外から増えてきて、たんなる地域の映画祭という枠を超えて世界の映画祭として注目されてきた。その象徴的な出来事が2007年の山形市から独立してNPO法人として発足したことである。当時は世界中の映画監督をはじめ多くの映画関係者が心配して懸念の声を挙げたが、映画祭はそんな懸念を払拭して成長をつづけ、昨年にはアメリカ・アカデミー賞の公認映画祭の1つとして認められている。

山形市はもともと1960年代の映画産業の凋落のなかでもメジャー系の直営館が最後まで残った都市の1つといわれるほど映画興行が盛んなところだった。その後、1970年代後半に「三里塚シリーズ」で知られる小川紳介監督が主宰する小川プロダクションが上山市に移住して『ニッポン国 古屋敷村』(1982年)や『1000年刻みの日時計 牧野村物語』(1987年)などを製作した。山形市が市制100周年記念事業として映画祭を企画した時、やるならドキュメンタリー映画祭がいいのではないかと提案したのが小川紳介監督だった。その当時は世界でもドキュメンタリー映画祭の存在は珍しく、今日では山形国際ドキュメンタリー映画祭と並んで有名なアムステルダム・ドキュメンタリー国際映画祭も1988年に始まっている。

山形国際ドキュメンタリー映画祭はたんに映画祭を開催することだけではない。日常的に自主事業を通して映画および映像の市民へのアウトリーチを実践している。例えば、映画祭のコンペティション部門を中心に上映作品をライブラリーで保存することで研究者や若い世代に鑑賞の機会を設けているし、近年では山形大学が講義等でライブラリーの所蔵作品を活用している。また「子どもの映画教室」のワークショップをはじめ「市民映画学校」などを通して老若男女への映画理解の普及を試みたり、東北芸術工科大学の学生作品の上映会や、例えば酒田市にあった伝説的な映画館グリーン・ハウスを描いた佐藤広一監督の『世界一と言われた映画館』(2017年)などの新作に協力したりと、さまざまな活動を行っている。

そんななかでも「やまがたと映画」という活動は、地域に埋もれた個人製作の作品を発掘したり、山形に関係する映画を調査したり、地域と映画・映像のかかわりを歴史的に考える上で興味深い。例えば、酒田市の金久酒造(のちの初孫酒造)の佐藤久吉が1930年代に撮ったホーム・ムービーなど、時代のなかの生活が生きて描かれている。こうした全国各地に死蔵された映像は、近年になって発掘・収集・保存される傾向が目立つようになったが、将来的には地域相互のネットワークを構築して近代日本の検証に役立つようになるだろう。

その一方、2011年の映画祭から始まった「ともにある」は、例

えば森元修一監督の『大津波のあとに』(2011年)や濱口竜介監督と酒井耕監督の『なみのおと』(2011年)など、東日本大震災の記録を収集・上映することを通して、「311ドキュメンタリーフィルム・アーカイブ」に結実している。この未曾有の災害の記録を収集して保存する活動は東北大学などによる幾つかのプロジェクトが生まれているが、山形ではドキュメンタリー映画祭における特集上映とともにアーカイブとして独自の活動を行っており、震災の記憶を現在と未来のために生かす試みが行われている。

山形と映画・映像に関して、山形国際ドキュメンタリー映画祭が30年間にわたって果たしてきた実績は大きいことは確かであるが、山形市ではもう1つ映画祭が開かれている。2005年に始まった山形国際ムービーフェスティバルである。これは東北地方のケーブルテレビネットワークに加盟する18局の主催による映画祭で、商業的な劇映画を対象としている。この映画祭の最大の特徴は1億円を上限とするスカラシップ制度にあり、例えば、2006年には三宅伸行監督の『Lost & Found』、2007年には山田篤宏監督の『ハッピーエンド』がグランプリを受賞している。いわばドキュメンタリー映画に対抗して劇映画の振興といえるが、こうした映画祭の立ち上がりも相乗効果によって山形と映画・映像のかかわりを大きくしているといえる。

このように山形と映画・映像の関係は、映画祭を通して、幅広く深いかかわりを示しているが、そのことが可能になったのは山形では古くから市民生活に映画が大きな位置を占めていたことによる。今日、山形市は「創造都市ネットワーク」の映画都市として映画・映像の新しい時代に向けた第一歩を踏み出しているが、何よりも山形大学や東北芸術工科大学をはじめとする教育芸術機関が研究や制作を通して地域の映画祭に積極的にかかわることで新しい様相を見せるようになったことは大きいだろう。

(むらやま きょういちろう／東部支部)

## 支部・研究会だより

## 映像テキスト分析研究会

藤井仁子

2018年度第2回(通算第19回)研究発表会は3月2日、早稲田大学において木原圭翔会員(東京大学大学院情報学環特任研究員[当時])を発表者に迎え開催されました。題目は『「或る夜の出来事」における「身体=システム」の策略』でした。以下、発表者自身による報告です。

\*

フランク・キャブラ監督の『或る夜の出来事』(It Happened One Night, 1934)は、1930年代の古典的ハリウッド映画を考察するうえで今なお重要な指標となる作品である。とりわけ、「エリコの壁」と呼ばれる毛布によって隔てられたモーテルでの主人公たちの一夜は、本作の中でもよく知られたシーンの一つだろう。本発表での議論の出発点は、そのシーンの序盤において、クラーク・ゲーブル(ピーター)が服を脱ぎ始める身ぶりが、ある有名なエピソードを生み出すことになったという事実である。それは、このシーンの影響で多くの男性が素肌の上に直接ワイシャツを着るようになったために、下着シャツ(undershirt)の売り上げが急降下したというものである。以後、多くの文献に幾度となく引用されることになるこのエピソードの真相自体は、実証的な根拠に乏しく、いかにも疑わしいと言わざるを得ない。一方で、映画作品が与えたこうした(マイナスの)経済効果の実態以上に重要なのは、まさにその当該場面において、現代の観客からするとミスとも思えるような「アクションつなぎ」が見られるという端的な事実である。そこではピーターの脱衣に耐えられなくなったエリー(クローデット・コルベール)がその場を逃げ出す瞬間が、あたかも2度繰り返されたかのごとく編集されている。しかし、ここで見られる奇妙なつなぎは、ピーターが試みている独自の策略行為に観客の視点が誘導されているという状況を正確に反映している。さらに、ここでのピーターの身ぶりは、ヒッチハイクのためにエリーがスカートの裾をめくり上げて脚を見せるという、もう一つの有名なシーンとも呼応している。すなわち、本作の主人公たちは、独自の方法で自らの「身体(system)」を巧みに駆使することで、それぞれが重大な目的を達成させている。モーテルのシーンに見られる奇妙なつなぎは、本作における身体の重要性を示す一種の痕跡として理解することができるだろう。

本発表では、こうした彼らの「身体=システム」の活用に着目し、本作の中でそれがいかに機能しているのかを検討した。そのうえで、従来から繰り返されてきた本作に関する論争——家長長制を強化する保守的な映画なのか、女性の自立を描いた革新的な映画なのか——に決着をつけるのではなく、スタンリー・カヴェルが展開した再婚喜劇論を参照しつつ、主人公たちそれぞれの能動性が生み出す「相互教育」の物語として評価した。

本作に限らず、古典的ハリウッド映画というのは、一般に言われるほど「透明」なものではない。逐一映像を止めながら分析することのできる現代のわれわれには、不可解と思われる映像の連なりが頻出する。しかし、それらは単なる技術的な限界でも稚拙な表現でもなく、大抵の場合は作り手の何らかの意図が反映された結果である。本作に関しては、編集、音声、演技といった諸々の製作技術の歴史的条件を念頭に置きながら、各シーンの分析をさらに詳細に行ったうえで、今後あらためて新たな現代的意義を提起していきたい。

\*

当日は春休み中であつたにもかかわらず20名ほどの参加があり、発表後には活発な議論が行なわれました。とはいえ、研究会活動のさらなる活性化のためには若い世代の会員によるより積極的な議論への参加が期待されることであり、今後の課題と捉えています。

(ふじい・じんし/映像テキスト分析研究会代表、早稲田大学文学学術院)

Image Arts and Sciences 185 (2019)

## アニメーション研究会

横田 正夫

日本映像学会のアニメーション研究会は、映像心理学研究会との合同で、平成31年3月9日、日本大学文理学部百周年記念館会議室2において、4:30から5:30まで開催された。発表者は渡部英雄(湘南工科大学、株式会社パンチ(顧問))会員で、発表テーマは「アニメーション業界の制作現場における演出の技術と方法」というものであった。当日用意された発表要旨は以下の通りであった。

2018年11月25日発刊、『アニメ研究入門(応用編)アニメを究める11のコツ』(現代書館出版)で私が執筆した「演出論-アニメーション業界の制作現場における演出技術と方法」をテーマに本研究会で発表いたします。

アニメーション業界の制作現場では演出がどのような技術や方法を用いてアニメ制作をしているのか。特に、アニメーション制作の映像設計(絵コンテ)に関する演出技術を中心に取り上げていきたいと思っております。

その内容は、

- ・アニメ業界で演出家になるにはどのように学ばよいか。演出家たちは、技術をどのように習得しているのか。
- ・過去のアナログ時代と現在のデジタル時代の演出技術と方法の違いについて、
- ・実写映画の演出とアニメの演出の相違点と共通点について、
- ・アニメ演出の仕事とは、
- ・アニメ業界の制作現場の流れ。プリプロダクション、プロダクション、ポストプロダクションで演出はどのような仕事をしているのか、
- ・演出はどこまでの範囲で権限があるか、
- ・映像設計としての絵コンテ作成についての基礎知識、マッチカットとカットアウェイそしてイマジナリライン(想定線)越え方など映画の文法ともいえる観客の混乱を防ぐ方法。
- ・アニメ演出の表現としての撮影技術について、
- ・など私の経験に基づいて述べていきたい。

なお、発表者の係わった作品リストについても発表者から提供されており、以下のようなものであった。

1979年からアニメ演出を開始し、担当作品は、テレビシリーズでは、「闘志ゴーディアン」(竜の子)「宇宙大帝ゴッドシグマ」(グリーン・ボックス)「百獣王ライオン」(東映)「宇宙戦士バルディオス」(葦プロ)「わ

## 映像心理学研究会報告

横田 正夫

が青春のアルカディア無限軌道SSX(東映動画)「銀河旋風ブライガー」(国際映画社)「銀河旋風バクシンガー」(国際映画社)「銀河疾風サスライガー」(国際映画社)「夢戦士ウイングマン」(東映動画)「GIジョー」(東映動画・米合作)「ふたり鷹」(国際映画社)「機動戦士Zガンダム」(サンライズ)「機動戦士ガンダムZZ」(サンライズ)「アタッカーYou!」(ナック映画社)「トランスフォーマー」(東映動画・アメリカ合作)「マペットムービー」(東映動画・アメリカ合作)「ランボウ」(東映動画・米合作)「北斗の拳2」(東映動画)「のたり松太郎」(日活・虫プロ)「シートン動物記」(エイケン)「アイドル忍者ミュータントタートルズ」(東映動画・米合作)「銀河英雄伝説」(キティーフィルム)「恐怖新聞」(キティーフィルム)「しばいたるか」(ナック映画社)「GUN道ムサシ」(ACCプロ)など、劇場やOVAビデオ関連では、「恐怖新聞」(キティーフィルム)劇場アニメ『11人いる』絵コンテ共同制作(マジックバス、キティーフィルム)3D立体視VHD・立体映像作品『スクーパーズ』監督(日本ビクター・ACCプロ)教育ビデオシリーズ「日本の歴史」各話監督(東映動画)ビデオ作品「シカとカンタ」監督(東映動画・シナノ企画)他。1992頃より5年間に亘りアニメーターに転向した。アニメーターとして原画担当の作品は、「宇宙の騎士テッカマンブレード」(竜の子)「無責任艦長タイラー」(竜の子)「キン肉マン」(東映動画)「ガイアース」(AIC)「銀河英雄伝説ライ」(イージーフィルム)「エトレンジャー」(シャフト)「新世紀エヴァンゲリオン」(ガイナックス)「スカイサーファ」(日本・米合作)「ジョニークエスト」(日本・米合作)「マッハGOGO」(竜の子)「メダロット」(ピートレン)他。

以上のようなアニメ制作現場での豊富な体験をもとに、演出家が何を考えているかについて紹介し、アニメーター間の師弟関係の様子や、カメラを、イマジナリーラインを越えて如何に設定するかといったカットニングに係るテーマまで、広く解説した。研究者にとって、現場の生の体験を聴くことは多くの刺激を得ることにもつながった。5:30~5:50まで質疑応答の時間を用意したが、発表時間が若干ずれ込み、質疑応答の時間があまり取れなかった。その分、その後の懇親会にて、活発な議論が重ねられることとなった。



(よこた まさお/日本大学文理学部)

平成30年度映像学会映像心理学研究会は、平成31年3月9日にアニメーション研究会と合同で開催された。開催場所は日本大学文理学部百周年記念館会議室2で、時間は3時から4時までであった。発表者は非会員の佐分利敏晴(佐分利奇士乃)(生態心理学・アニメーション研究者)氏で、発表テーマは『「今日を生き延びるためにアニメーションが教えてくれること」におけるいくつかのトピックについて』であった。当日の発表要旨は以下の通りであった。

佐分利敏晴初の単著となった「今日を生き延びるためにアニメーションが教えてくれること(学芸みらい社、2018年12月発行)」の中から、特に重要と言える箇所について解説する。序章で扱った「アフォーダンスとアニメーション」について、および巻末の片瀬須直監督との対談「作品の舞台に観る者を招き入れる」で話題が上がったことを取り上げる。アフォーダンスとは、一見特別なことのように思われることもあるが、実際にはわたしたち動物が生活している「環境」=「身のまわり」に、実に身近にある、行為に利用できる情報の資源である。それは様々なアニメーションにも作り込まれ埋め込まれており、それが登場人物たちの行為に利用されている。

巻末の片瀬須直監督との対談では、様々なトピックが扱われた。その中から「風の表現とレイノルズ数」「『かぐや姫の物語』の一場面、かぐやの疾走の描写」「登場人物同士の協調を描くことと実在感」「ストーリーを追わず、ディテールに埋め込まれた物語を読むこと」などについて特に取り上げ、紹介する。

発表者の専門の生態心理学やアフォーダンスは、芸術分野では、デザインの世界でよく目にする用語であり、概念である。発表者は大学院時代、生態心理学を専門とする教員に、アニメーションこそアフォーダンスを実践していると熱く語り、学生であるにもかかわらず、教員に時間を貰って話をする機会を作ってもらった経験があるとのことであった。そうした学生時代からの考察を、学位論文としてまとめ、それを一般に分かりやすいように噛み砕いた形で出版したものが今回の発表の中核となっている。その意味ではアニメーションが、自身の生きる道しるべにもなっているのであり、アフォーダンスの自らの実践があると思われる。特に印象深かったのは「かぐやの疾走の描写」で、人物の形態を保存して疾走を描く必要はなく、疾走の実質が再現できていれば、疾走は知覚されると説明する。動きの本質が捉えられ、それが定着されていれば、輪郭もった人間の形を描く必要はないのである。これは、アニメーションの本質にかかわることで、興味深いものがあった。4:00~4:20に質疑応答の時間を用意した。フロアからは、聖地巡礼との関係はあるのかといった質問などが出されていた。



(よこた まさお/日本大学文理学部)

## ビデオアート研究会

瀧 健太郎

第20回ビデオアート研究会 (1月12日)

第21回ビデオアート研究会 (2月23日)

内容:『リフレクション ヴィデオ・アートの実践的美学』を読む [vol.1 ~ vol.2]

[vol.1]

日時:2019年1月12日(土)17:00 - 19:00

会場:東京大学駒場キャンパス 18号館2階院生研究作業室(席数20)

[vol.2]

日時:2019年2月23日(土)14:00 - 16:00

会場:渋谷区勤労福祉会館洋室4(席数30)

パネリスト:河合政之(東京造形大学非常勤講師/学会員)

進行:瀧健太郎(ビデオアートセンター東京/武蔵野美術大学非常勤講師/学会員)

内容:2018年12月に水声社から刊行された『リフレクション ヴィデオ・アートの実践的美学』を、著者の河合政之氏の解説とともに精読する研究会を開催しました。[vol.1]では第II部第4章辺りまで、テキストの位置づけと用語や概念の解説を交えて、[vol.2]では第5章以降のアーティスト別、ビデオアートの作品を個別に見ながら、結論部分へと読み進めました。著者はビデオアートの実質的な素材としてビデオの電子信号に着目し、その中で循環する情報を閉回路「フィードバック」システムに見出し、そこではシグナル(有用)とノイズ(無用)といった二元論的な分離ができないことから、アナログとデジタルの特質の違いをこのフィードバックを通じて明示します。そして視覚・情報を電子信号に依拠する生活世界(例えば発信と受信を同時に行うユーザーなど)においても、このフィードバックの現象を拡大してメディア社会を捉えることを提案しています。そこで著者は初期のアナログのビデオのフィードバックを扱う作家たち(ヴィト・アコンチ、飯村隆彦、ゲイリー・ヒル、ヴァスルカ夫妻、ナムジュン・パイク、など)の試みを閉回路システムを利用したシグナルの逸脱として読解しなおす可能性を説きます。

研究会ではまず我々が見落とし勝ちだと考えられる、道具としてのビデオの捉え方ではなく、電気的に生成され、循環する信号のフローとしてのビデオの定義や、デジタル技術への過渡期としてアナログ・ビデオを下位概念として捉える方法論ではなく、現代のポスト・デジタル時代においてこそ先に挙げた作家たちの試みが普遍性を持ちうることへの理解を深めることができました。ビデオアートの実践がこのようなメディア社会の自己言及的な試みとしてあるとするなら、次にデジタルのビデオの実践が果たして「リフレクション=反省」の契機となってきたかどうか、更なる議論の余地が生まれたといえます。

当該テキストは著者が本研究会を通じて得た知見から考察された部分もあり、本研究会の成果としてこれまでを総括するような会となりました。

テキストの情報はこちら。

<http://www.suiseisha.net/blog/?p=9972>

今後の計画について

本研究会はビデオアートのアカデミックな研究と、制作や展示現場のフィールドワークを交互に行なう方針で発足されました。今後も定期的にビデオアートを学術的に研究する試みと、制作や展示現場を現地調査する形で研究会を進めたいと考えております。研究内容は随時、参加メンバー内で話し合いを行います。

\*ビデオアート研究会はメンバーリストで研究会の情報や資料な [taki.kentarou@ebony.plala.or.jp](mailto:taki.kentarou@ebony.plala.or.jp) を共有しております。研究会参加ご希望の方は、



(瀧) までご一報ください。

自著について解説する河合政之氏 (vol.21 から)

(たき けんたろう/東部支部)

# 映画文献資料研究会

西村 安弘

2019年1月12日(土) 13:00~18:00、東京工芸大学芸術学部 中野キャンパス2号館B1 マルチメディア講義室にて、下記のように第46回日本映像学会映画文献資料研究会を開催しました。(以下、明星大学の奥村賢会員による報告)

「2018年度科研費『『日本映像記録センター』研究』シンポジウム 日本映像カルチャーセンター 映像作品コレクションの再検証とその意義」

## [概要]

映像文化が現代社会を大きく支える今日にあって、映像遺産の発掘、収集、保存、利用は映像の発展のみばかりでなく、社会そのものの発展にとってもきわめて重要な意味をもつ。しかしわが国には、このうえなく貴重であるにもかかわらず、正当な評価がされないまま、埋もれてしまっている映像遺産が少なからずある。「日本映像カルチャーセンター」が所蔵する映像作品コレクションは、その代表格のひとつである。2016年度から2018年度にかけて実施してきた科研費研究『『日本映像記録センター』の研究 ~眠る映画遺産の発掘~』は、この一大コレクションに再び光をあて、その意義をあらかにしようとしたものである。2019年初頭には本研究の最終年度末にあたるため、今回の研究会で3年間にわたる調査研究の概要を報告するとともに、シンポジウムも実施し、さまざまな角度からその内容について考察してもらうことにした。当日の構成は以下のとおり。

【1】基調報告【2】作品上映【3】シンポジウム

## 【1】基調報告

まず、研究代表者の奥村賢(明星大学)がこのプロジェクトの発端から着手に至るまでの経緯、作業経過と調査結果、および今後の展望について報告した。

### (1) 牛山純一とNAVLコレクション

本コレクションはテレビ界の伝説的人物、故牛山純一氏の映像アーカイヴに対する並々ならぬ情熱に大きく支えられて誕生したといっている。氏は1972年、日本テレビ放送網を退社後、テレビドキュメンタリー制作を専門とする日本映像記録センターを設立、ついで79年、映像遺産の研究、収集、保存、公開利用を目的とした「映像カルチャーセンター」(NAVL)を発足させた。本コレクションの本体を形成することになったのが、このとき世界各国から収集された膨大なフィルムである。

このコレクションが衆目を集めたのは、戦前のイギリス・ドキュメンタリー運動の諸作品、戦前アメリカのニュー・ディール映画、映像人類学の泰斗ジャン・ルーシュの民族誌映画、当時の東独のテレビ作品、イギリス放送協会のドキュメンタリー番組、カナダ国立映画庁の教育映画、ソビエト連邦時代の各種のロシア映画など、日本ではほとんど目にするのでできなかったものがその多くを占めていたからである。さらに現在、日本ではここにしかないフィルムも含まれている。これだけ貴重な映像作品を短期間のあいだに数多く集めることが可能だったのは、牛山氏の国際的人脈が並外れたものだったことが大きく起因している。彼の精力的な収集、上映活動により、日本人の映像世界はこのとき、一気に広がったといっても過言ではない。

しかし「日本映像カルチャーセンター」の活動は、その後、経営難に見舞われ、しだいに後退し、1980年代には事実上、停止に追い込まれることになる。以降、ときおり一部が上映されることがあっても、全体としてはほとんど陽の目をみるものがなくなり、長い歳月を経て、現在に至っている。ただしフィルムは、2006年から川崎市市民ミュージアムに寄託されている。

## (2) 研究調査の内容

このプロジェクトはこうした状況を打破し、もっと多くの人々にこの貴重な遺産を享受してもらうことを最終目標に立案されたものであるが、今回の研究調査では、実質的に寄託作品の現状確認が作業の大半を占めることになった。主因は各作品の基本情報を採集、整理するのに、途中、予想外の障壁に幾度となくぶつかり、多くの時間を要してしまったことにある。たとえば現状確認、つまり目録化の第一段階では、まず、川崎市市民ミュージアムの収蔵庫にあったリール缶をひとつひとつ取り出し、寄託された当時に作成されたと思われる作品リストと照合しながら点検、確認していくことになっていたが、作業を開始してみると、リストに記載されているものがなかったり、逆にリストにないものが存在したり、あるいは作品IDひとつに複数の作品が混在していたりして、その都度、対処方法を検討しなければならなかったことなどがあげられる。また、海外のフィルムには日本語字幕がついていなかったのも、将来の映画利用のことを考慮し、このとき重要度の高いいくつかの作品をピックアップし、音声や字幕の翻訳を試みることにしたが、当初の予定にはなかったこの日本語化作業を同時進行させたことも、結果的に全体の作業速度に影響をあたえることになった。

当初は細かいフィルム状態(カーリング、酢酸臭、ピッチ詰まりなど)まで含め、詳細なデータを採集していたが、収蔵庫にある寄託フィルムすべてを点検するのに相当な時間を費やさねばならないことが判明してきた段階で、方針を変更し、最終的に目録では、所在情報、分類情報、形態情報(タイトル、音声や色、スクリーンサイズ、サイズ、巻数、長さ)の基本データだけを採集、記載することにした(図版参照)。

ID	内蔵ID	RF番号	収録番号	録音号	2018年	タイトル	外国語音声	色	スクリーンサイズ	サイズ	巻数	巻数	収録時間
1802	13	牛山2408-013	89	04-05		BÄCHWERK AUF SILBERMANNORGELE	ja	35mm	35mm	1	1	1:40	
2018年11月撮影情報													
巻N	9904	N	DDR13	フィルム	BÄCHWERK AUF SILBERMANNORGELE GV	巻数	1	巻数					
フィルムカード、表裏													

(図版)

基調報告では以下の表を示し、点検後のフィルムの内訳および数字の誤差について説明した。「一般収集」について作品数の差があまりにも著しいが、この件に関しては会場に臨席されていたNAVLの市岡康子常務理事から後日、報告を受けた。理事もこの数字には疑問を抱かれたようで、あらためて調べたもらった結果、誤差の約100本はNAVLのフィルムではないことがあきらかになった。関係のないフィルムがどういった経緯で紛れ込んでいたのか、いまとなっては推察も難しい。しかしずれにしろ、これも、報告会を開催したから判明したことであり、今回の研究調査のひとつの成果といえる。

映像カルチャーセンター映像コレクション  
フィルム本数内訳 (欠番、テープは除外)

区分名称	一般収集	特別収集						整理番号外
		東独テレビ	カナダ国立映画庁	ジャン・ルーシュ	ソビエト連邦	ソビエト連邦	ソビエト連邦	
		DDR	NFBC	JR	USSR	USSR	USSR追加分	
サイズ	16ミリ	16ミリ 35ミリ	16ミリ	16ミリ 35ミリ	16ミリ	35ミリ	16ミリ	
既存資料の数字(A)	498	62	30	52	33	121	16	0
点検後の数字(B)	595	62	30	52	31	127	16	5
(B) - (A)	97	0	0	0	-2	6	0	5
総計								918

(3) 展望／提言

今回のプロジェクトはこれでいちおう終息するが、隠れた映像遺産を表に浮上させ、もっと多くの人々に実現してもらえるようにするという最終地点まで到達するには、以降も同種のプロジェクトを継続、発展させる必要がある。当然ながら、次なる課題はこのコレクションの活用であろう。そして広範かつ有効な活用之道をつけるには、まず、目録のさらなる充実化とデータベース化をはかること、第二に、日本語訳添付の可能性を探ることが不可欠だと考えられる。とくに後者だが、映画作品に日本語の補助がなく、日本人観客がアクセスしづらい現状を少しでも改善するには、なんらかのかたちで日本語を添付することが望ましい。焼付け字幕、投影字幕、同時通訳など、上映時に日本語を並行させる工夫について早急に検討すべきであろう。

【2】作品上映

第二部では、来場者の方々に映像コレクションの意義をより実感してもらうために、参考上映をおこなった。上映したのはコレクションのなかから選んだもので、映画史的に重要だと解される映画だが、寄託フィルムは契約上、館外上映が許可されていないので、上映には同一内容の別素材を用いた。ただし、当然ながら、この素材も字幕、音声ともに原語のみなので、先に述べた試行的に作成していた日本語原稿も同時に配布し、映画理解の円滑化をはかった。上映作品は①『キノプラウダ 20号』(1924年、ジガ・ヴェルトフ、16分) ②『夜行郵便列車』(1935年、バジル・ライト&ハリー・ワット、24分) ③『ある夏の記録』(1961年、ジャン・ルーシュ、90分) で、①はロシア文化研究者の出口千晶氏、②は国立映画アーカイブ各員研究員の濱口幸一氏、③は日本映画大学の伊津野知多氏にそれぞれ翻訳や翻訳監修を担当していただいた。とくに出口氏には当日、わざわざスクリーン脇に立ち、ロシア語字幕に合わせて日本語原稿を情感豊かに読みあげるといふ、無声期の活動弁士さながらの活躍をしていただいた。

【3】シンポジウム

第三部では、まず各パネラーが上映作品について、各々の専門分野の視点からみずからの分析や見解を順次、あきらかにしていった。畠山宗明(聖学院大学)氏の発表は、『キノプラウダ 20号』を当時のソ連のジャーナリズムとの関係から読み説き、その歴史的意義の再考を促すものであった。伊津野知多と村尾静二(国立民族学博物館)の両氏の発表はともに『ある夏の記録』をめぐるもので、前者は「他者」[投射=同一化]という概念を運用しながら、同作品が共同監督であったモランとルーシュの思考の結節点となったことを説き起こし、後者は映像人類学の学術的枠組みや研究課題が議論された国際人類学・民族学会議(1973年)を牽引し、重要な決議をまとめたルーシュの功績をあらためて指摘するものであった。『夜行郵便列車』に関しては、奥村

が世界ドキュメンタリー映画運動史のなかで同作を位置づけるとともに、映画表現における音声と映像との協同作用に言及した。もうひとりのパネラー、・とちぎあきら氏(IMAGICA Lab.)は、今回、急遽、出席がなくなっていたが、すでに発表原稿は用意されていたので、代わって奥村がその要旨を伝えることにした。東京国立近代美術館フィルムセンター(現 国立映画アーカイブ)の前主幹でもあるとちぎ氏の発表は、アーキヴィストの観点に立つものであった。今回の上映作品の素材に関する詳細な注釈から始まり、コレクションの価値づけをおこなうための方法論にまで及ぶ内容で、最後に強調されていたのは、フィルム情報と作品情報を統合しデータベース化する(=コレクションとしての形成史があきらかになる)ことの必要性であった。

ついで、西村安弘氏(東京工芸大学)の司会進行のもと、ヴェルトフ、フラハティ、グリアスン、ルーシュの4人の関係、インタヴューと映画、撮る側と撮られる側の交換的側面、映画の修復といった横断的テーマについて、各パネラーによる有意義な意見交換がおこなわれた。ドキュメンタリー映画史上の代表的作品とはいえ、今回、上映されたのはコレクションのほんの一部であった。それにもかかわらず、示唆に富む議論がこのとき活発に交わされたことを考えると、コレクション全体のもつ歴史的意義や社会的意義、文化的意義の潜在的豊かさをあらためて感じざるをえない。このシンポジウムもまた、本コレクションの重要性を再認識させるものとなったのではないかと思う。

(報告者 奥村 賢)

※ 事前に印刷した広報のチラシやポスターに以下の誤植がありました。ここに訂正し、お詫び申し上げます。

「日本映像カルチャーセンター」(1972年設立) → 「日本映像カルチャーセンター」(1979年設立)

『ある夏の日』 → 『ある夏の記録』

# アナログメディア研究会

太田 曜

活動報告 2019年4月まで

アナログメディア研究会主催

カラーもモノクロも1日で学ぶ、8ミリフィルム現像ワークショップ

2019年3月17日(日曜日) 10時～18時

小金井市天神前集会所 小金井市中町1-7-7

資料代：500円

共催：8ミリフィルム小金井街道プロジェクト

<https://www.facebook.com/8mmFKKP>

<https://twitter.com/8mmfkkp>

参加者 16名

このワークショップは、8ミリフィルムを使って、その画像生成の仕組みから、撮影、自家現像までを1日で学ぶという盛り沢山、かつ超詰め込みの企画であった。しかし、大阪や静岡からも日帰りで参加した方もおられ、関心が高いことが窺われた。また参加者は高校生から年配者まで、年齢層も幅広く8ミリフィルムや自家現像が一部のマニアにだけ注目されているのではないと思われた。今や機材は中古でしか入手困難、フィルムも、何処でも買える訳でもなく、面倒なメディアである8ミリフィルムにはまだまだ存在価値があるのだろう。映像産業の中では、あるいは映像メディアの製造、販売の世界では、メディア、支持体としてはどうに退役して久しい8ミリ（をはじめとする）フィルムだが、表現のメディアとしては、かけがえのないものとして未だに幅広い層から支持され続けている。アナログメディア研究会が行うこうしたワークショップも“表現のメディアを消滅から救済する”為に多少の役には立っているものと考えられる。

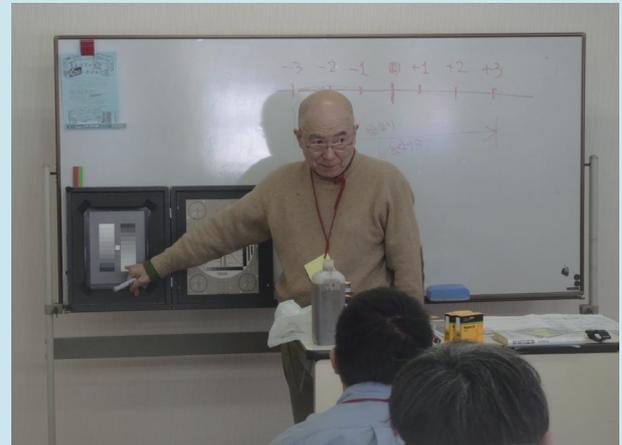
ワークショップの実際は以下のような進行だった。



最初はレクチャーで、銀塩フィルムが光によって画像を生成する仕組みについて。フィルム感度、絞り、シャッタースピードに関して。

単体露出計の使用法、露出計のスマホ・アプリについて、マニュアル露出での撮影のやり方。

入射光式露出計の使い方の実際。



カラーチャート、グレースケールの撮影。絞りとNDフィルターで適正露出と、オーバー、アンダーを意図的に撮影。



現像、自家現像のやり方を実際にやりながら説明。

モノクロリバーサル現像、カラーリバーサル現像を現像時間や液温も変えて行う。



映写・上映。

それぞれ異なった処方での撮影、現像された“カラーチャート、グレースケール”の映像を映写機で映写して比較しながら検討して終了。

文責 太田曜

アナログメディア研究会主催

アラン・エスカル ALAIN ESCALLE 作品上映&トーク

2019年4月22日 月曜日 19時30分～21時30分

PLACE M 東京都新宿区新宿 1-2-11 近代ビル 3F

<http://www.placem.com/map.html>

資料代：1000円

来場者：28名+特別授業受講生4名、

デジタル合成、CGを駆使し、たった一人で、自宅のスタジオで制作するフランスの映像作家アラン・エスカルの上映とトーク。トークでは最先端のデジタル機材、ソフトから生み出されるアラン・エスカルの映像作品の制作に潜むアナログ的な手法について紹介された。撮影編集を終えた『死者の書』を企画書や、シナリオに縛られる事なく再び作り直した『死者の書 スペシャルヴァージョン』は新たにCGも付け加えられて全くかつての『死者の書』とは別の作品になっていた。

上映作品

『D'APRES LE NAUFRAGE 難破の後』

- 1994年 9分
- 監督：アラン・エスカル
- 描画・特殊効果：アラン・エスカル
- 音楽：フランソワ・ファルジア
- 編集：マリアンナ・プーシラ
- 製作：Mikros image, Grand Canal
- 配給：Studio AE
- フォーマット：DCP, Blu-ray, 35mm, Digital Betacam
- 1994年 SCAM デジタル作品グランプリ受賞



『浮世物語 (Le conte du monde flottant)』

- 2001年 / フランス・日本 / 35mm / カラー / ドルビー SRD / 24分 / 1:1.85
- 監督、脚本、ヴィジュアル・エフェクト アラン・エスカル (ALAIN ESCALLE)
- 制作会社 MISTRAL FILM (フランス)
- 共同制作 T.E.V.A.(フランス)
- 配給・宣伝 ミストラルジャパン
- プロデューサー 木部直之、水由章
- 撮影、照明 浜口文幸
- 音楽 セシル・ルプラド
- 編集 フランク・マニャン
- ポストプロダクション T.E.V.A.
- 出演 大橋可也、小林良也、中村優子、鈴木卓爾、中原和宏、他
- IMAGINA2002 グランプリ受賞



『Le Livre des Morts 死者の書』スペシャルエディション

- 2018年 35分
- 監督：アラン・エスカル
- 音楽：フレーミング・ノルドコック
- 映像・音響：スタジオ AE / Autour de minuit
- 使用言語：ロシア語 字幕：フランス語、英語、ヘブライ語、スペイン語、中国語、日本語





トークの様子

トークの様子



文責 太田曜

アナログメディア研究会 協力企画  
映画上映会「フチュウ・フィルム クロニクル」

日時：2019年1月19日 [土] 12:30～16:10

1月20日 [日] 13:00～19:15

会場：白糸台中部公会堂（府中市白糸台 2-67-31 白糸台中央公園内）

主催：東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、NPO 法人アーティスト・コレクティブ・フチュウ（ACF）

協力：日本映像学会アナログメディア研究会

府中でもっと面白いアートに触れたい！という願いを込めた、NPO 法人アーティスト・コレクティブ・フチュウ [ACF] による、無料のアートフィルムの上映会。

多摩在住の 8 人の映像作家による 5 プログラムのアートフィルム上映と作家トークを行った。

ビデオ上映の他、8 ミリフィルム、16 ミリフィルム作品のオリジナルフォーマット上映を行う貴重な場となった。

- 【プログラム 1・ほのぼのとした笑いでつづる日記映画】内村茂太
- 【プログラム 2・独特な浮遊感と批評的な視点で世界をえぐる】山崎幹夫
- 【プログラム 3・二人のアニメーション作家による作品集】芝辻ペラン詩子・富永まい
- 【プログラム 4・自身の内面を笑いと優しさでえぐる 2 作品】歌川恵子
- 【プログラム 5・フィルムで味わう、実験映像作家たちのディープな夜】馬淵徹・ヤジマチサト士・川口肇

上映作品リスト

- 内村茂太
  - 『富士山とジョンレノン』1993 / 5 分 / 8mm フィルム
  - 『僕の新婚旅行』2002 / 40 分 / 8mm フィルム
  - 『おしゃれ 29/29』2003 / 25 分 / 8mm フィルム
- 山崎幹夫
  - 『世界はがらくたの中に横たわり』1984 / 12 分 / 8mm フィルム
  - 『ターミナルビーチ X』1981 / 35 分 / 8mm フィルム
  - 『泥のなかで生まれた』1986 / 17 分 / 8mm フィルム
  - 『じょっぴん』1988 / 3 分 / 8mm フィルム
  - 『VM の漂流』1990 / 9 分 / 8mm フィルム
- 芝辻ペラン詩子
  - 『天地創造』2006 / 2 分半 / DVD
  - 『LITTLE HELP』2004 / 3 分半 / DVD
  - 『クマちゃん物語』2000 / 4 分 / DVD
- 富永まい
  - 『風見鶏と煙突男』2006 / 8 分 / DVD
  - 『水筒少年』2004 / 21 分 / DVD
  - 『ナマケモノシロップ』2003 / 5 分半 / DVD
  - 『BUONOMO“BUSUTAMAN”』2001 / 5 分 / DVD
  - 『くろこげ』1995 / 11 分 / 16mm フィルム
- 歌川恵子
  - 『こころのうた』1998 / 50 分 / DVD
  - 『みみのなかのみず』1993 / 36 分 / 8mm フィルム
- 馬淵徹
  - 『sodium light baby』2010 / 4 分半 / 8mm フィルム
- ヤジマチサト士
  - 『つきよみ』2005 / 12 分 / 16mm フィルム
- 川口肇
  - 『rack-pinion (wired-glass No.4)』2017 / 5 分 / 16mm フィルム
  - 『位相 Phases of real』1997 / 25 分 / ビデオ
  - 『AQUARIUM』1991 / 6 分 / 16mm フィルム
  - 『vanishing-eight』2009 / 3 分半 / 8mm フィルム
  - 『Noodle-Cat-Cogs』2009 / 6 分半 / ビデオ
  - 『観測』2018 / 3 分半 / 8mm フィルム
  - 『filmy』1988 / 5 分 / 8mm フィルム
  - 『Air』1992 / 6 分 / 8mm フィルム

文責：川口肇

## 写真研究会

前川 修

去る3月24日、京都精華大で昨年度2回目（通算3回目）の写真研究会を開催いたしました。発表・報告は以下の二つでした。

.....

・中村絵美（美術家／北海道開拓写真研究協議会代表）

：北海道リアリズム——「長万部写真道場」から辿る1950年代の集団撮影活動の事例について

・久保和真（大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻博士後期課程）

：写真のなかの扉——ウジェーヌ・アジェの「敷居経験」について

.....

中村氏の報告は、長万部町を中心にしたカメラクラブ「長万部写真道場」の発見と、現在も継続中の調査についてのものでした。資料発見から数年に及ぶ調査、そして二度（2018年、2019年）にわたる写真展とフォーラムを介して、当時のアマチュア写真家の実践の広がりがだいに浮かび上がってきた経過が、豊富な資料をもとに報告されました。

彼らカメラクラブのメンバーたちの実践の特徴は、全国のアマチュア写真家たちと腕を競いながらも、個々の名ではなく「集団」名で写真を発表している点にもあります。これは、写真特有のアマチュア的なものを考えるうえで興味深い側面です。また、彼らが一地域の一時代の生活の様子を写真によって網羅的に蓄積していった点も見逃せません。残された写真は、この意味で、ある種の「シャドウ・アーカイヴ」（アラン・セクーラ）として一地方に眠っている、ヴァナキュラーな写真行為の膨大な痕跡を指し示しているとも言えるからです。さらに、彼らが土門拳の「リアリズム」からの影響を公言し、日々の人々の労働の様子を撮影している一方で、その写真に、「リアリズム」から微妙に逸れるようなアングルや構図、フレーミングやモチーフの配置が顕著に残されていることも見てとることができました。これも、写真におけるヴァナキュラー化の一例となるのかもしれない。

報告後の質疑では、発見された写真の物質的特性、とくに、台紙に貼り付けられた写真とマウントされたボジスライドに関して、彼らがどのように写真を提示していたのかということ、そして、集団とはいえ出自の違うメンバーたちがそれぞれの社会的文脈に応じてどのような差異をもって活動を展開していたか等が議論されました。今後のさらなる調査によって、こうした問いに対する答えは明らかになると考えられます。

久保氏の報告は、アジェの写真、とくに扉を写しこんだ写真群に新たな解釈を行おうとするものでした。もちろん、報告者も指摘していたように、アジェの写真についてはアビゲイル・ソロモン＝ゴドーやロザリンド・クラウスによる批評があり、彼女たちがそこで、それまでのMoMAを中心にした美的制度への彼の写真の囲い込みに異議を申し立てたことは、すでによく知られています。しかし、報告者は、アジェの写真を彼自身の謎めいたキャプション、あるいはアジェの写真が含まれるアーカイヴという側面から、さらにはジョン・シャーカフスキーが2000年に刊行した『アジェ』とその詩的なキャプションを発火点にしながら、表象として彼の写真を読むことの意義を主張しました。

報告後の質疑では、第一に、そもそもシャーカフスキーがMoMAで精力的なキュレーションを行い、美術史的な写真言説を紡いでいた時期はこれよりも遡るものであり、晩年のシャーカフスキーのテキストよりも『写真家の目』（1964）や『今日に至るまでの写真』（1990）に見られる、彼の言葉の過剰さや逸脱を発火点にした方が良いのではないかという提案があった。第二に、アーカイヴの複数性や重層性を押し広げていくことで、そうした複数のアーカイヴの隙間におけるアジェの写真の位置やそれゆえの揺動性が明らかになり、それこそが、彼の写真を解釈

する際のアクチュアリティになるのではないかという意見もありました。また、報告者の研究が実は志向していると思われる、アジェ受容に見られる、アメリカにおける視覚文化の生成と変容と、その際にある種の契機となった（アジェ受容に典型的に見られるような）ヨーロッパとの差異という問題への視座について議論がありました。

先のソロモン＝ゴドーやクラウスの言説以後、それを踏まえうえてアジェ研究を進展させる試みが依然として少ないことを考えれば、本報告は今後、アジェ研究の拡大や深化の契機をもたらしてくれることが十分に期待される内容だと思われます。

以上、二つの発表・報告は、写真の潜在的な集合の層への思考を誘発するという点で共通した問題を提起していました。

今回の研究会はまだ仮決定ではありますが、夏に名古屋で開催の予定です（映像学会のMLで告知をさせていただきます）。発表の申し込み等については、写真研究会HP（<https://sites.google.com/site/jasiasshaken/>）をご覧ください。次回も多数の参加をお待ちしております。

（まえかわ おさむ／写真研究会代表）

# アジア映画研究会

石坂 健治

アジア映画研究会 報告

第2期第9回(通算第27回)例会

日時:2019年2月6日(水)18:00~20:00

会場:国際交流基金・御苑前オフィス7階アジアセンター

座長:杉原賢彦(目白大学、本学会員)

内容:

①ヴェトナムを見続ける:デュラスの『インディア・ソング』と『アガタ』を通して

ゲスト/発表者:河野美奈子(立教大学/フランス文学)40分+討議

②孫瑜監督作品に見られるスタイルの一貫性

ゲスト/発表者:吉川龍生(慶應義塾大学/中国文学)40分+討議

①の「ヴェトナムを見続ける」の発表では、フランスを代表する女性作家であり同時にシネアストでもあったマルグリット・デュラスが少女時代を過ごしたヴェトナム(より正確には仏領インドシナ)に焦点を当てつつ、その小説作品——『インディア・ソング』(1974年)や『アガタ』(1981年)のなかの人物を手がかりとして、デュラス作品における原風景を明らかにしようとした。

小説から映画へと移し替えられたとき、そこに描き直された風景には遠い記憶のこだまが刻まれているが、それ以前の小説中においても、地名や河の名、あるいは特定の固有名詞などによって、デュラスが少女時代を過ごした土地の記憶が呼び覚まされてゆくさまが、的確な論拠と図によって示された。

討議においては、「ヴェトナム」とすべきかどうか(「仏領インドシナ」としたほうがよかったのではないか)という問題提起がなされ、旧植民地をどう表すべきか一石を投じることとなった。

②「孫瑜監督作品に見られるスタイルの一貫性」についての発表では、孫瑜監督作品『おもちゃ』(1933年)と、ほぼ同時期に製作・上映された程歩高監督の『春蚕』(1933年)との比較を通じて、孫瑜が当時、作り上げた映像世界のユニークさを指摘していった。そして、『おもちゃ』に見える諸特徴が、1930年代を通じて孫瑜作品に散見され、明確なスタイルが出来上がっていたことを検証するとともに指摘した。

より具体的には、澀刺とした健康美を写し出す映像にその特徴がはっきりと顕れており、女性の肢体の躍動感をスクリーンに惜しげもなく表出させていった次第に、同時代の他の監督作品とは異なる孫瑜作品の特徴が明らかにされたほか、理想郷としての農村の在り方やメロドラマ的な顔の描写などが挙げられた。

さらに、孫瑜作品中、批判的に語られることの多い『武訓伝』(1950年)を肯定的にとらえ直すことが可能ではないかという視点から、新たな孫瑜研究の端緒を引き出そうとするとともに、その影響の時代的な広がりへの再考を促すものとなった。

発見に満ちた発表において、さまざまなコメントが会場をにぎわせたが、孫瑜作品を現在という視座から見直すべき意味を見いだすことができたというのが大きな収穫だったように思う。(杉原)

第2期第10回(通算第28回)例会兼催イベント

「ベトナム映画の夕べ〜歴史・女性・娯楽〜」

共催:国際交流基金アジアセンター、ムービー・アクト・プロジェクト

日時:2019年4月3日(水)16:00~20:40

会場:アテネ・フランセ文化センター

座長:夏目深雪(アジア映画研究・映画批評家)

内容:

①講義「ベトナム映画史〜南北の歴史から紐解く〜」(50分)坂川直也

②講義「ベトナムアクション映画の興隆〜ゴ・タイン・バンを中心に〜」(50分)坂川直也

③シンポジウム「ベトナム娯楽映画の魅力」(50分)坂川直也×宇田川幸洋×浦川留×夏目深雪(司会)

④上映 チャン・ビュー・ロック、グエン・ケイ共同監督『サイゴン・クチュール』2017年(100分)



盛り上がりを見ているベトナム映画をフィーチャー。ゴ・タイン・バンという(アクション)女優&映画製作者&映画監督をピックアップし、講義&シンポジウム&劇場公開予定作のプレミア上映という通常より大規模で豪華な例会兼一般公開イベントを3者共催で実施した。

①と②は東南アジア映画研究者の坂川直也氏の講義。①は75年の統一以前は南北に分かれていたベトナムの映画の歴史と特徴をレクチャー。北ベトナムでは社会主義リアリズムの影響を受けた国民映画(ナショナル・シネマ)が製作され、南ベトナムでは、主に民間映画会社のもとで、メロドラマ、コメディ、怪奇映画などの商業娯楽映画が製作された。近年のベトナム娯楽映画の興隆は南ベトナムの娯楽映画の歴史の厚さを踏まえたものであるのだ、と腑に落ちた聴衆が多かったようだ。

②は南北統一後、南の共和国政権下の映画を封印したことから、その娯楽映画の歴史がいったん断絶してしまい、アクション後進国であったベトナムがどうやって立ち上がったかのレクチャーとなった。『The Rebel 反逆者』という、ゴ・タイン・バンが主演した2007年の映画がエポック・メイキングとなる。この映画でゴ・タイン・バンはベトナムの武術ポピナムを取り入れた華麗な格闘アクションを披露。坂川氏の最も得意分野であるアクション映画についての熱のこもったレクチャーは聴衆を圧倒し、貴重な抜粋映像にみな見入った。

③は中華圏のアクションに詳しい映画評論家の宇田川幸洋氏と映画ライターの浦川留氏を加え、座長の司会でゴ・タイン・バンのアクション映画を中心にベトナム娯楽映画を総括。中華圏のアクション映画から影響を受けて立ち上がってきた東南アジア映画、その中でもさらに後発のベトナムアクション映画を立体的に浮かび上がらせる作業となった。タ

イの『マッハ!』(03)は香港アクション映画に勝ったが、ベトナムアクション映画はまだ勝っていないという宇田川氏に、ゴ・タイン・バンという女性ファイターの登場の重要性、男性と全く同等に闘う新しい女性像など、浦川・夏日の女性陣が反論し、イベントのタイトルである「歴史・女性・娯楽」に最もふさわしい瞬間となった。

④イベントの最後に、民族衣装アオザイとその継承をテーマとする『サイゴン・クチュール』のプレミア上映をおこなった。

平日の夕方からの開催にもかかわらず多くの聴衆に恵まれた会となった。東南アジアの上映会というと中高年の男性が多いそうだが、テーマのせいか若者や女性が多く見られたのもいい予兆である気がした。(夏目)



以上

(いしざか けんじ/アジア映画研究会代表、日本映画大学)

# メディアアート研究会

関口 敦仁

「メディアアート研究会」2018年度報告と2019年度計画について  
研究会企画の展覧会と研究会を年一回予定しています。

2018年度メディアアート研究会企画展示

日時：2018年9月15日（土）～9月30日（日）

場所：愛知県立芸術大学芸術資料館「拡張する知覚展— 人間表現とメディアアート」として7名の作家による展示をおこなった。



会場エントランス風景



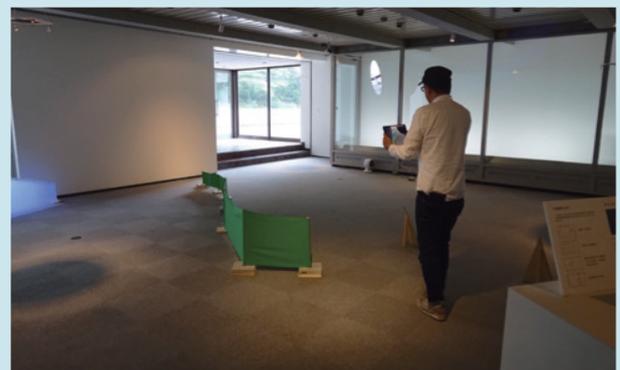
上下の視線と左右の視差をコントロールする作品  
「左：視覚装置Ⅱ—視軸について、右：視覚装置Ⅰ—視差について」大泉和文（中京大学工学部教授）



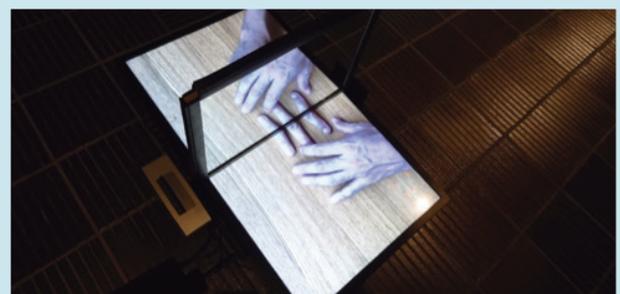
「視覚装置Ⅰ—視差について」部分 大泉和文



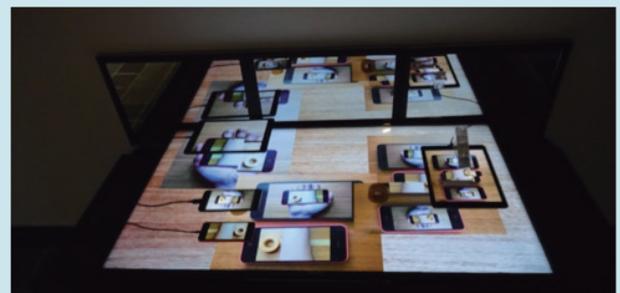
人工生命によるシミュレーション映像「GitC\_Installation Movie」BCL [福原志保・Georg Tremmel]（アーティスティック・リサーチ・フレームワーク）ゲスト



ARによって景観にアプローチする。「景観の解像度」山本努武（名古屋学芸大学メディア創造学部准教授）



視覚によって自らの身体性に認知作用する作品  
「ボディジェクト指向」



現実と人工物から、虚構の境目がわからなくなる作品。  
「公認候補」  
小鷹研理（名古屋市立大学芸術工学部准教授）ゲスト



木製スケールアームによるアナログなドローイングマシン、映像インスタレーション「アーム・イグジスタンス」

関口敦仁（愛知県立芸術大学美術学部教授）



ガムを噛み続ける人物とその気配を感じる人物の映像  
木下雄二（愛知県立芸術大学美術研究科博士前期課程）ゲスト



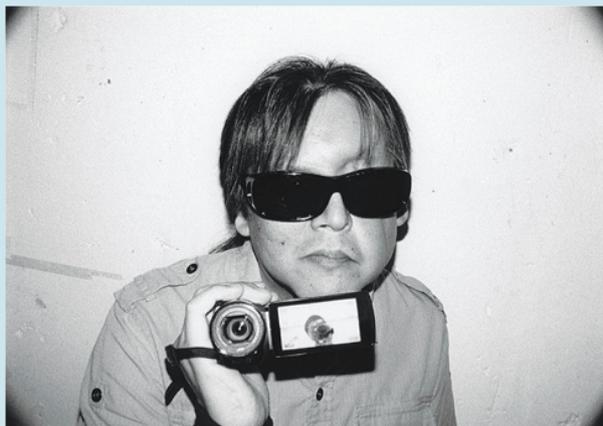
ドローイングされた線が溶けていく映像。長時間かけて消えていく特性を持つインクによるドローイング。

上「dimension/scribble」、下「Ghost drawing」  
大崎のぶゆき（愛知県立芸術大学美術学部准教授）

・2018年9月22日（土）愛知県立芸術大学芸術資料館演習室において、キュレーター／プロデューサーの田中みゆきさんに講演「見えない世界から見えるもの」をしていただいた。自身がプロデュースした生まれながらの全盲者が映画をつくるプロセスを追うドキュメンタリー『ナイトクルージング』（本年3月より全国順次公開中）などについての着眼点など、製作者にとっての新しい視点を提供して頂いた。

そして、田中氏を、交えて、小鷹研理、大泉和文、大崎のぶゆき、関口敦仁でディスカッションを行い、新たな表現の方向性について有意義な話が進められた。

『ナイトクルージング』および田中みゆきさんの情報はこちら



<http://miyukitanaka.com/>

・2019年度メディアアート研究会企画展示予定

「藝術創造する装置アートの発生について展」

日時：2019年9月20日（土）－10月6日（日）

場所：愛知県立芸術大学芸術資料館

展示作家：真鍋大度（Rhizomatiks）ゲスト、外山貴彦（名古屋造形大学）、大泉和文（中京大学）、山本努武（名古屋芸芸大学）、関口敦仁（愛知県立芸術大学）ほか。

（せきぐち あつひと／メディアアート研究会代表、愛知県立芸術大学）

## 関西支部

大橋 勝

平成30年12月15日(土)に、京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパスにて、関西支部第85回研究会が開催され、下記2件の研究発表が行われました。

「アニメーション作画の為の人体立体構造のマニュアル」大阪芸術大学大学院芸術研究科博士後期課程 李旻球(イ・キョング)会員  
「美術館におけるソーシャリー・エンゲイジド・アートの可能性ー映像・インスタレーション・アーカイヴー」京都工芸繊維大学大学院博士後期課程 平井菜穂会員

李会員の発表は、アニメーター志望の学生に向けて、人体構造を理解するための平易な教材を提供するための方法論と実践の報告でした。専門性の高い人体解剖学をわかり易く噛み砕き、単純化とデフォルメを通じて立体的に人体を把握させることを狙いとしています。印刷物としてまとめられており、実際の教育現場での利用を目指しています。

平井会員の研究では、ソーシャリー・エンゲイジド・アートについて、その鑑賞行為について考察が行われました。これは市民の参加によって成立する芸術実践であり、しばしば参加によって露わになる社会問題に焦点があてられますが、これに参加しなかった一般の鑑賞者をどう位置付けるのか。いくつかの作家の戦略と、美術館の新たな社会的機能にまで踏み込んで、この問いが検討されました。両研究ともユニークなテーマと内容で、質疑応答では活発な質問が飛び交い、有意義な議論が行われました。

研究会終了後には平成30年度関西支部総会が開催され、事業及び予算についての報告と提案が行われ、承認されました。

平成31年3月23日(土)には、関西支部第86回研究会が関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスにて開催されました。研究発表は以下の2件です。

「トリュフォー映画における死のイメージ再考」関西学院大学 安部孝典会員  
「ジャン・ルーシュとクリス・マルケルーアフリカとシネマ・ヴェリテ」大阪大学文学研究科 東志保会員

たまたまですが、今回は両研究ともフランスの映画作家に関するものでした。安部会員の研究はフランス・トリュフォー作品に遍在する死のイメージを検証するもので、先行研究を参照しながらも、具体的な作品・シーンに独自の光を当てるものでした。特に無重力状態と落下運動をめぐる考察は、トリュフォー映画に対する新たな言説の可能性を示してくれました。

東会員の研究は、アフリカという共通のテーマを手掛かりに、ジャン・ルーシュとクリス・マルケルを比較しています。二人の映画作家をとりあげた作家研究であると同時に、人類学映画とダイレクト・シネマ、シネマ・ヴェリテ、ヌーヴェルヴァーグをつなぐ線を紐解く考察にもなっていました。両研究とも活発な質疑応答が行われ、研究の更なる発展につながる意見が飛び交いました。

(おおはしまさる/関西支部代表)

## 中部支部

前田 真二郎

<報告>

中部支部では、2018年12月に第2回研究会を、2019年3月に第3回研究会を開催した。それぞれ同日に幹事会を開き、支部運営における情報共有、意見交換を行った。

<第2回研究会概要>

2018年度 | 日本映像学会 中部支部 | 第2回研究会

日時: 2018年12月22日(土) 13時~16時半

会場: 名古屋芸術大学東キャンパス1号館7階アセンブリーホール

(〒481-8503 愛知県北名古屋市熊之庄古井281番)

◎研究発表

作品「音響写真」ー写真表現による音の視覚化についてー  
松浦拓也会員(名古屋学芸大学)

要旨:

美術作品におけるメディア領域間の在り方に疑問をもったことが私の作品制作背景にある。現代に於ける美術作品の多くは、多様なメディアの垣根を越えて構成されており、それは写真メディアも同様である。加工した写真はCGなのか。ディスプレイに出力したものや、プロジェクターで投影した写真は静止画の枠を超えた映像作品になってしまうのか。紙媒体に印刷したものだけが写真なのか。このように、写真は様々な領域を横断し得るメディアであるとも言えるのではないかと。しかし、私はこうした現状に否定的ではない。様々なメディアが混在する世の中だからこそ新たな作品表現が生まれているのではないだろうか。私の作品制作でのベースとして、「写真メディアを介す」という方法論がある。2015年より継続して「音響写真」シリーズを制作、研究している。本作品で組み合わせ、制作している技法クラドニ図形(サイマティクス)および、フォトグラムについての先行作品やこれまでに制作したシリーズを踏まえ解説する。記録性特性のある写真を使って、目には見えない音の軌跡を提示する。また、昨年開催した個展「Sonic Photogram - 音の定着-」について報告する。

◎作品発表

「移動型ラボにおけるメディア表現」

河村陽介氏(名古屋工業大学大学院工学研究科社会学専攻博士後期課程)

要旨:

移動型ラボ(モバイルラボラトリー)は英国、米国、アフリカなどで運用されている特殊設備を備えた移動型の研究室の総称である。米国ではその用途のひとつとして設備や教員が不十分な遠方の学校に専門家とともに出向き、STEM 或いは STEAM などの科学教育を普及するための活動が行われ、教育の地域格差を埋める方法として活用されている。移動型ラボは環境調査を主とした科学教育用途のものと、FAB 機器などの工房施設を備えた創作活動用途のものに大別される。本発表で紹介する移動型ラボ「MOBIUM」は位置情報や加速度、環境情報などを扱ったメディア表現に関する創作活動に特化しており、都市部、山間部問わずワークショップや展示活動を行なっている。2005年から実施している過去のプロジェクト事例やその制作プロセス、また現地の環境や住民との関わりなどについて解説し、創作活動、特にメディア表現における移動型ラボの有効性を示したい。

## ◎招待講演 1

「つながる／かさなる視覚メディアと身体」

酒井健宏氏（映像作家・映画研究）

## 要旨：

このあいだテレビでやったアニメの映画をビデオに録ったからパソコンで見る。ありふれた発言のように聞こえるが、本来これは実に複雑なことだ。視覚メディアは多様化 (multi-) かつ多層化 (layered) している。今日このような状況をもたらしているもっとも大きな要因が、デジタル技術に基づく視覚メディアの普及によるものであることに議論の余地はないだろう。今や私たちはパソコンやスマホに表示される静止画像を「写真」と言い、デジタルデータで上映される動画画像を「映画」と呼んでいる。この複雑さと直面しながら視覚メディアを研究対象とするには一体どのような視点が有効であろうか。本講演では、視覚メディアの歴史において生じた複数の「写真から映画へ」に注目することで、その視点の一つを提供したい。とりわけ視覚イメージの加工（いわゆる編集や合成）の様態とその歴史の変容に着目し、それぞれの「写真から映画へ」が（イメージとして記録された）身体をどのように加工および表象してきたのかを例に挙げながら示したい。

## ◎招待講演 2

「物質性—非物質性 デザイン &amp; イノベーション」展 あるアーカイヴの試み

真下武久氏（成安造形大学准教授）+ 竹内創氏（名古屋芸術大学准教授）

## 要旨：

「物質性—非物質性 デザイン & イノベーション」展（京都 ddd ギャラリー／2016）は、1985年にバリのボンビドゥー・センターで開催された「非物質的なもの (Les Immatériaux)」展（ジャン＝フランソワ・リオタール監修）へのオマージュである。本研究は、物質性をキーワードに展覧会アーカイヴの「ある試み」を行う。我々は非物質的な環境に取り囲まれて生活している。そうした中、今改めて「物質性」が問われることになってきた。“印刷物に収まりきれない作品の記録と再表現は可能であるか？”京都展に関わったことで展覧会のアーカイヴというものを感じるきっかけになった。「非物質的なもの」展（1985）のカタログは印刷物ではあるが、ページが綴じられていない。カード式と呼ばれるものになっており、作品同士の関連性を読者が自由に見つけられるよう意図的に作られている。このカタログをモデルにノンリニアに体験できるアーカイヴができないかと考えた。参加した作家のイニシアルを使ってポスターをデザインすることから始め、このポスターをインターフェイスとして展覧会の風景、作品、情報を検索する装置として作り上げている。今回のアーカイヴは、読者がポスターの前でタブレット端末 (iPad) を操作し、AR（拡張現実）技術によって展示作品を非物質的に浮かび上がらせることになる。

## &lt;第3回研究会概要&gt;

2018年度 | 日本映像学会 中部支部 | 第3回研究会

日時：2019年3月1日（金）13:30-

会場：名古屋造形大学 C棟 (C601)

(愛知県小牧市大字大草 6004)

## ◎研究発表

「休日映画」—ネットワーク上における短編映像群による映像表現の試みについて—

齋藤正和会員（名古屋学芸大学）

## 要旨：

「休日映画」は2009年から続けてきた短編映像群によるプロジェクトである。本作品は、スクリーンやTVモニターによる視聴ではなく、PC上で動画共有サイトにアップロードした映像を視聴することを想定して制作をはじめ、現在もアップデートし続けている。この10年間、映像の制作・視聴環境の変化には目紛しいものがあった。一眼レフカメラによる映像制作は一般化し、また、ネットワークを介してのPCやスマートフォンによる映像視聴もすっかり定着した感がある。本発表では、制作開始時のメディア環境に触れながら作品の制作背景を述べることで、現在の映像環境について検討することを試みたい。

## ◎学生作品プレゼンテーション

## ●名古屋造形大学

『/CENTUM (パーセントム)』 | プロジェクションマッピング

伊吹悠、後藤弘樹、酒井久栄、出口暁与、辻ひかる

(造形学部 デジタルメディアデザインコース4年)

## ●名古屋芸術大学

『BRAIN LIFE』 | シングルチャンネル

高橋陸 (デザイン学部 デザイン学科 メディアデザインコース4年)

『あたたかさ 一作り手から買い手へ』 | シングルチャンネル

加藤亜実 (デザイン学部 デザイン学科 メディアデザインコース4年)

## ●名古屋学芸大学

『生まれてくる君へ』 | インスタレーション

成田開 (映像メディア学科 インスタレーション領域4年)

『わたしが知っている本当のこと』 | 写真

半澤奈波 (映像メディア学科 フォト領域4年)

『ユメみばなにうつつ』 | シングルチャンネル

増田優太 (映像メディア学科 アニメーション領域4年)

## ●椋山女学園大学

『観光・絶景～愛知県の四季と魅力～』 | シングルチャンネル

市川鼓乃美 (文化情報学部 メディア情報学科4年)

『生理痛ちゃん』 | シングルチャンネル

大崎彩花 (文化情報学部 メディア情報学科4年)

『なくしてません』 | シングルチャンネル

高橋佑果 (文化情報学部 メディア情報学科4年)

## ●情報科学芸術大学院大学

『Processing を用いた深層学習の可視化の試み』 | インスタレーション

津曲洸太 (メディア表現研究科 修士1年)

『displayed\_scape』 | インスタレーション

小濱史雄 (メディア表現研究科 修士2年)

『multi-faceted』 | インスタレーション

長野優子 (メディア表現研究科 修士1年)

## ●愛知淑徳大学

『ジェンダーと若者～インタビューにもとづくドキュメンタリー映像～』

| シングルチャンネル

坂下可蓮 (メディアプロデュース学部 メディアコミュニケーション専修4年)

『古民家×プロジェクション「こみくしょん」』 | ソーシャルアート

森本真由、猪飼みちる、成田彩、野々山慧音  
(創造表現学部 メディアプロデュース専攻3年)

●愛知県立芸術大学

『Elephant's』 | シングルチャンネル

池田夏乃 (美術学部 デザイン・工芸科デザイン専攻 メディア領域 4年)

『Wire Frame Architecture』 | インスタレーション

石川陽菜 (美術学部 デザイン・工芸科デザイン専攻 環境領域 4年)

以上

(まえだ しんじろう / 中部支部担当常任理事、情報科学芸術大学院大学)

## 編集後記

西村 安弘

『日本映像学会報』185号(PDF版)をお届けします。昨年の第45回総会で会報の発行を年間3回に改めてから、ようやく3号目の発行に辿り着くことができました。この間、総務委員会で適宜編集方針の見直しを行い、イベントの告知や助成金の新規募集などの案内は、会員へのメール配信のみとし、会報には各種委員会や研究会の活動記録の掲載に特化することになりました。年1回秋に発行予定のペーパー版は、従来通り、研究発表及び作品発表の概要を含む大会報告号となります。

1年間の総務委員会の活動を経験して、ようやく年間スケジュールを把握できたかなと、ぼやけた視界がやや開けたように思われた頃に、昨年度の途中から事務局の仕事が急遽お引き受けいただいた清水馨さんが、ご都合により業務を離られることになりました。元々は前任者がお辞めになられたピンチヒッターとして、ご無理を承知で後任をお願いしていたものです。清水さんのご協力がなかったならば、学会報が大幅な遅滞なく発行できなかったことは疑いようがありません。感謝の意を述べさせていただくと共に、今後のご活躍をご祈念いたします。

(にしむら やすひろ / 総務委員長・東京工芸大学)